

LINGUISTICS | 当代语言学研究文库 |

金镜玉◎著

日本語動詞のアスペクト性
及びその統語構造について

日语动词的体 及其句法条件探析



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



LINGUISTICS | 当代语言学研究文库 |

本文获上海对外经贸大学“085工程”项目资助
(项目编号: Z085WGYX13063)

金镜玉◎著

日本語動詞のアスペクト性
及びその統語構造について

日语动词的体 及其句法条件探析

 上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内 容 提 要

迄今为止,日语的时体研究作为日语语法研究的一项重要组成部分,已有很多卓有成效的研究成果。但是这些研究主要以日语动词的Vテイル形及其意义分类为主,大多为形态论研究。本书主要通过情状类型和句法结构的考察,从不同的视角,考察日语动词体及其句法条件。本书在研究过程中,力求摆脱以往单从形态论的角度进行分类的方法,主要从意义论角度进行阐述和考察,以揭示日语动词体及其句法条件的体系性及规律性。

图书在版编目(CIP)数据

日语动词的体及其句法条件探析/金镜玉著. —上海:
上海交通大学出版社, 2015
ISBN 978-7-313-12329-9

I. ①日… II. ①金… III. ①日语-动词-研究
IV. ①H364.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 270044 号

日语动词的体及其句法条件探析

著 者: 金镜玉

出版发行: 上海交通大学出版社

邮政编码: 200030

出 版 人: 韩建民

印 刷: 凤凰数码印务有限公司

开 本: 880mm × 1230mm 1/32

字 数: 201 千字

版 次: 2015 年 2 月第 1 版

书 号: ISBN 978-7-313-12329-9/H

定 价: 38.00 元

地 址: 上海市番禺路 951 号

电 话: 021-64071208

经 销: 全国新华书店

印 张: 7.75

印 次: 2015 年 2 月第 1 次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者: 如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话: 025-83657309

まえがき

本書は主に日本語のアスペクト問題を扱うものである。

従来の日本語のアスペクト研究は、テンス論から独立した文法論の一種として、数多くの研究の業績をあげている。しかし、これらの研究は主に形態論的なアプローチから、動詞のVテイル形に基づいてその意味分類を細かく分析・記述してきたものが多く、一部の領域ではすでに議論済みの問題も少なくないと言わざるを得ない。

本書は、そこから少し視点を変え、構文意味論的観点から、動詞のアスペクト性を文の諸成分との共起関係の中で見つめ、事象構造における諸要素のアスペクト的意味関係の体系性を確立しようとするものである。

特に日本語のアスペクトはどのような文構成のもとに、どのように解釈されるかという、文の統語現象について詳細に記述することにする。

構文におけるアスペクトを論じるに当たり、本書では特に二つの側面に焦点を当てて論じることにする。その一つは動詞により示される事象の「動き」と「変化」、及びその時間構造、もう一つは「限界性」にみられる事象構造の仕組みである。

出来事や状態を総じて事象とするが、事象は大きく「動態」と「静態」に分けられる。「動態」を定義するのがこの「動き」と「変化」で、これは、事象アスペクトのもっとも基本概念の一部である。

英語を対象にしたアスペクト研究においても、日本語を対象にしたアスペクト研究においても、「動き」と「変化」が基本概念として重要な内容であることはすでに多く論じられてきた問題である。前者では Vendler (1967) によって事象が状態 (States)、活動 (Activities)、到達 (Achievements)、達成 (Accomplishments) の四つに分類されるという研究が最も多くあげられるが、活動 (Activities) が「動き」に、到達 (Achievements) が「変化」にほぼ対応し、達成 (Accomplishments) を活動 (Activities) と到達 (Achievements) の組み合わせで定義するモデル理論^①がすでに固まっている。後者においては、奥田 (1977) が、金田一 (1950) の動詞4分類を批判し、「動き」と「変化」を動態を構成する基本概念として設定し、Dowty (1979) と同様に、「動き」と「変化」を組み合わせることによって使役変件事象が定義されると示している。

このように、動態が「動き」と「変化」によって定義されるという分析は、異なる言語の間でも接点が見られ、広く受け入れられている。本研究においても、このような研究成果を踏まえ、動詞分類につき、日本語の動詞を状態動詞と動態動詞に大きく分け、動態動詞を変化がなく、動きだけを表す活動動詞、変化だけを、その動きの過程を言及することなく表す変化動詞、動きや変化をその意味の中にもに内包する達成動詞という、主に「動き」と「変化」による意味的分類を試みる。また、それをさらに過程のあるものとないものに横断し、6種類に分類して細かく考察する。

① Dowty (1979) による研究であるが、後に Pustejovsky (1992, 1996)、影山 (1996, 1997) などによる事象アスペクト研究の基礎となっている。

本論で取り上げるもうひとつの大きな問題は「動き」と「変化」により示される事象の「限界性」である。事象アスペクトを扱う意味理論や意味分析においては限界的か非限界的かが事象の分類基準として一般的に取り入れられている^①。

北原(1999)は「動詞句の限界性とは動詞句によって表される事態に限界点が存在するかどうか、すなわち、事態の終了時点の有無に関することを指すもの」とした。

須田(2002)にはつぎのような定義^②がある。限界とは、出来事の時間的な展開において、そこに至れば、出来事が自己を使い果たし、それ以上進展することのできないような、出来事の時間的な境界である。限界性は、文のさしだす出来事における内的な時間構造のもっとも一般的な特徴であり、限界的な出来事と非限界的な出来事は、文の対照的な内容における、もっとも一般的な対立である。そして、それはもっとも集約的に動詞の語彙的意味の中に定着していて、動詞が語彙的な意味において、さししめす動作のもつ、もっとも一般的で、義務的な時間的な特徴となっている。つまり、すべての動詞は限界動詞か、非限界動詞かの、どちらかに分けられるのである。限界動詞と非限界動詞という動詞分類は、意味的な一般性を持っているが、同じ語彙的な意味を持つ単語において対立する形態論的な形ではなく、動詞語彙を意味的な共通性によって二分するもので、形態論的なカテゴリーではなく、「語彙－文法的な種類」と呼ばれる分類的カテゴリーを構成するものである。

① 岩本遠億(2008)「事象アスペクト論」 開拓社: P6

② 須田義治(2002)「現代日本語のアスペクチュアリティの体系について」 日中対照言語学会 白帝社: P54

- (1a) 子犬が一時間で死んだ。(限界—変化事象)
- (1b) 太郎が一時間で本を読み終わった。(限界—達成事象)
- (1c) 太郎が一時間ずっと部屋にいる。(非限界—状態事象)
- (1d) 太郎が一時間本を読んでいる。(非限界—活動事象)

限界動詞には(1a)のように変化だけを表すものや、(1b)のように達成を表すようなものがある。いずれも、その動詞により表される事象に限界点が存在することが特徴として挙げられる。

一方、非限界動詞とはその語彙的意味の中に限界点がないもので、(1c)のように一時的状態の広がりを表すものや、(1d)のような一定期間内における活動だけを表すものがある。

アスペクトは、時間軸上の一時点(基準時点)との時間的な関係付けにおいて顕在化する、動作の内的な時間構造(動作の時間的な展開の性格)の動詞の語形変化による表現である^①。

アスペクトは動詞のVル/Vタ・Vテイル/Vテイタのような本動詞やVハジメル・Vツヅケル・Vテオワル・Vテアルのような複合動詞の後項により、顕在的に示される。

限界性が文の対象的な内容における一般的な意味であれば、動詞の語彙的意味だけではなく、文の構文論的な構造によって、限界性が表現されることもある。したがって、アスペクトは文構成素の語彙的性質が相互作用することにより、潜在的に表れると言える。

しかし、いずれにせよ、構文におけるこれらの言語手段は事

① 須田義治(2002)「現代日本語のアスペクチュアリティーの体系について」 日中対照言語学会 白帝社: P46

象の限界性というアスペクトの根本的性質にかかわるものであると考えられる。

本論では構文における諸成分がいかに動詞の語彙的意味にかかわり、それが事象の限界性をいかに解釈するのか、いわゆるアスペクトに対する構文内諸要素の統語的指定と制限について詳しく分析することにする。それを通して、動詞の語彙的意味により、共起可能な連用成分が指定され、共起する連用成分により動詞のアスペクト性が確定され、最終的にアスペクト形式が落ち着いていくプロセスを提示する。

ここまでの研究を遂行するにあたり、多くの方々からご指導、ご支援を蒙っている。特に、上海外国語大学の許慈恵教授にはテーマの決定から、枠組みの設定、および完成後の内容修正に至るまで、長期にわたって、懇切丁寧なご指導を頂いておる。

また、全般の研究において、ご指導、ご教示をいただいた上海外国語大学の皮細庚教授、呉大綱教授、上海对外经贸大学の徐曙教授、邱根成教授、早稲田大学日本語教育研究科の川口義一教授などにも、深く謝意を表したい。

最後に、この本を書きあげるまでずっと暖かく見守り、ここまでの成果に導いてくれた家族にも、感謝を捧げたい。

目 次

第一章 序論	1
1.1 本研究の目的	3
1.2 研究の内容	5
1.3 用例の出所およびその妥当性について	6
1.4 アスペクト研究の流れ	7
1.4.1 Vendler(1967)による事象の4 分類	7
1.4.2 影山(1996)の語彙概念構造	11
1.4.3 日本語のアスペクト研究の流れ	14
1.5 本書の構成	25
第二章 事象とアスペクトについて	27
2.1 事象とは	28
2.2 日本語動詞の分類について	31
2.3 アスペクトについて	33
2.3.1 動詞の語彙アスペクト	34
2.3.2 文法的アスペクト	35
2.3.3 事象アスペクト	37
2.3.4 語彙アスペクト、文法的アスペクトと事象 アスペクトの相関性	40

第三章 日本語動詞の語彙アспектについて	43
3.1 日本語の状態動詞について	43
3.1.1 状態動詞の種類	43
3.1.2 状態動詞の統語的特徴	46
3.2 日本語の動態動詞について	47
3.2.1 活動動詞	47
3.2.2 変化動詞	57
3.2.3 達成動詞	64
3.3 事象タイプの関連と相違	72
3.3.1 アспект性における活動事象と達成事象 との相違	72
3.3.2 アспект性における変化事象と達成事象 との相違	74
第四章 形態論的なカテゴリーとしてのアспект	76
4.1 完成相と継続相	76
4.1.1 Vル/Vタのアспект的意味	76
4.1.2 Vテイル/Vテイタのアспект的意味	80
4.2 日本語のアクションザルト	93
4.2.1 時点を表す局面について	96
4.2.2 事象の過程を表す局面について	100
4.2.3 事象の結果存続を表す局面について	108
第五章 事象の限界性について	113
5.1 事象の過程性について	114

5.1.1	過程性と限界性との関係	115
5.1.2	過程性と主体の意志性	116
5.2	限界性のバリエーション	117
5.2.1	非限界動詞	120
5.2.2	外的な限界	122
5.2.3	内的限界性について	123
5.2.4	他動詞における限界性	126
第六章	アスペクト転換とその統語条件	131
6.1	動詞の範疇的意義と事象のアスペクト転換	131
6.2	アスペクト転換と数量表現——移動構文を例 として	134
6.3	事象のアスペクト転換	138
6.3.1	非限界動詞のアスペクト転換	138
6.3.2	限界動詞のアスペクト転換	142
第七章	事象構造におけるアスペクトの指定	149
7.1	名詞句によるアスペクト的指定	150
7.1.1	名詞句＋ガ	151
7.1.2	名詞句＋ヲ	153
7.1.3	名詞句＋デ	159
7.1.4	名詞句＋カラ	160
7.1.5	名詞句＋ニ	162
7.1.6	名詞句＋マデ	167
7.2	副詞句によるアスペクトの指定	169
7.2.1	時間副詞	171

7.2.2 頻度副詞	175
7.2.3 程度副詞	178
7.2.4 情態副詞	187

第八章 事象におけるアスペクトの決まり方について

.....	202
8.1 事象アスペクトにかかわる諸要素	202
8.2 事象におけるアスペクトの決まり方	204
8.2.1 事象アスペクトを決める外的要素	206
8.2.2 事象アスペクトにかかわる内的要素	207
8.2.3 アスペクトの限定要素	214

第九章 終章

9.1 本研究の結論	225
9.2 日本語教育への示唆	228
9.3 今後の課題	230

参考文献	231
------------	-----

第一章 序 論

人間の言語活動は、外界における事象を描写するには「文」という形をとるものであるが、「文」には「時間」という要素が必ず混じりこんでいる。というのは、世の中は、常に変化するものであり、変化は時間を離れては成り立たないからである。

事象に内在する時間という要素はテンスとアスペクトにより示されるのである。事象が時間軸上に占める位置を表すのはテンスで、それは発話時点あるいは基準時点との前後関係という観点から、出来事とその過去であるか、現在であるか、未来であるかというのを表す。そのとき、必要に応じて、(2a)～(2c)のように、時間副詞でその時間を明記する。

(2a)太郎は先週、海外出張に行った。(過去)

(2b)太郎は今、研究室にいる。(現在)

(2c)太郎は、明日帰国する。(将来)

一方、文はテンス以外の時間表現も含む。

(3a)太郎は壁にペンキを塗った。

(3b)太郎は今、壁にペンキを塗っている。

上の例において、(3a)は完成相で事象を丸ごと捉えるのに対し、(3b)は継続相で、事象が完成したものではなく、進行中で

あることを表している。

このような時間的性質をアスペクトと称する。

テンスとアスペクトはともに時間に関わる文法範疇であるが、時間に対する両者の捉え方は異なる。テンスが事象を時間軸上の一点に位置づけるのに対し、アスペクトは時間軸上における事象の展開を表すのである。この意味で、テンスは時間を点的に、アスペクトは時間を線的に捉えるということができる。

また、両者はつながりながら、お互い牽制する存在であるのである。

「本を読む」を例にすると、「読む」という活動動詞自体はテンスとして現在ではなく、未来を表すため、「2時間後、本を読む」というように、未来に行われる出来事を丸ごと示すしかない。

活動動詞が現在を表すには、今まさにその活動の中にあるという意味になるため、「本を読んでいる」というように、継続相で表すことになる。つまり、活動動詞が現在を表すには、主体の意志を表さない限り、事象を丸ごとではなく、その最中にある出来事として持続的に表すしかない。しかし、過去を表すには「二時間前に、本を読んだ」、「2時間前に、本を読んでいた」というように完成相と継続相いずれも使える。

このように、テンスとアスペクトは明確に区別されるべき時間概念で、お互い絡み合って文に現れるものである。

本書は主に、事象のアスペクトについて考察する。

日本語のアスペクト研究は今まで、多くの研究者により、数多くの研究の蓄積が残してある。従来のアスペクトの研究は、おもに動詞をVテイル形の意味に基づき分類し、形態意味論的

観点から研究することを中心としてきたと言っても過言ではない。

日本語の動詞は多くの場合、構文の核心的存在であり、アスペクトは動詞の形態変化を通して文に現れるというのは周知のとおりである。しかし、ひとつの動詞は複数のアスペクト的意味に関係する場合が多く、また文のアスペクト的意味はただ動詞だけにより決められるものではなく、共起成分の強い意味的制約を受け、多様に変化するのである。

今までのアスペクトの研究を振り返ってみると、Vテイルの基礎となる動詞のアスペクト分類に多くの力がそそがれ、動詞の表す複数のアスペクト的意味が動詞とほかの成分のいかなる共起条件と共起制限により示されるものであるのか、文の諸要素がアスペクト的意味にどれほどかわるのか、特に述語成分と文のほかの諸成分とのアスペクト的意味関係の体系性の構築まで総合的な研究はあまり多くみられないのが現状である。

このような考慮のうえ、本研究は現代日本語の事象構造におけるアスペクト的意味関係の体系性を確立しようとするものである。その際、特に動詞のアスペクト性と構文に現れるほかの諸成分とのアスペクト的意味関係を中心として考察を進めていくことにする。

1.1 本研究の目的

絶えず流れていく時間の中で、我々はさまざまなものの生起、変化、ひいては消滅を経験しながら生きている。言語は我々が経験する外界の状態や出来事を時間的特性をもつものと記号化された形で表現するのである。

(4a) 太郎は今、危険な道を行っている。

(4b) 太郎は今、アメリカに行っている。

「行く」という出来事を見る時、われわれは出発点から目的地までの移動という連続的な動きを観察する。(4a)の「太郎は今、危険な道を行っている」という文になると、まさに移動という連続的な動きの進行過程はとらえるのである。しかし、(4b)の「太郎は今、アメリカに行っている」は、普通、動きの連続的なプロセスは捨象され、「太郎」の位置変化の結果だけを取り出して表現するのである。つまり、同じ動詞を述語とする二つの文でありながら、それぞれ動きの過程と動きの結果という、まったく異なる局面を問題にしているわけである。二つの文における構造的相違といえ、ただ、前者では「危険な道を」、後者では「アメリカに」という名詞句の異なりしか観察できない。これは、名詞句の意味的相違により、文が異なったアスペクト性を呈するということを意味し、文のアスペクト性における、連用成分の指定的役割を示している。つまり、事象のアスペクト的意味は動詞だけでなく、連用成分など、文のほかの要素により決まってくるということも考えられる。

それでは日本語の文において、事象のアスペクト性はいかに決められ、その仕組みはどうなのか、本論文は形態を基にして分析、記述してきた従来のアスペクトの研究方向から少し視点を変え、動詞の意味特徴と連用成分との共起可能性などを含め、構文意味論的な視点から、日本語の事象構造におけるアスペクト性の解明を主な目的とする。そのため、主に動詞の語彙アスペクトを主として、構文内における動詞と共起成分との関

係、およびそれにかかわる諸要素を体系的にまとめあげ、記述・説明していくことを試みる。

1.2 研究の内容

本研究は動詞のアスペクト性を主として事象構造における諸要素のアスペクト的意味関係を考察するもので、主に動詞のアスペクト性をほかの成分との共起関係の中から見つめ、分析する。

事象のアスペクト性を決める要素として、述語の意味特徴が最も重要視されるべき問題であることは言うまでもない。というのは、アスペクトは動きや変化の時間構造を表すもので、主に述語動詞の形態変化により示されるのであるからである。したがって、いかなる動きであるのか、いかなる変化であるのか、というのはまず、本研究の主な内容である。

しかし、アスペクトは述語だけの意味により決まるのではなく、構文におけるほかの諸成分の意味的制限をうけ、潜在的かつ顕在的に現れるのであると思われる。潜在的意味とは動詞と共起成分との意味的結合関係によるもので、主に事象における限界性というアスペクト性と深いかわりがある。

(5a) 太郎は熱心に本を読んでいる。

(5b) 太郎は本を三冊読んでいる。

たとえば、(5a)では「読む」という動きの進行過程に焦点がおかれ、事象は非限界的になるが、(5b)においては、動きの全体量を示すことで、動きの過程ではなく、その結果について言及するようになる。つまり、事象を限界的に表しているのである。